

密なき無人駅の旅

一字一筆

静岡の今 110

コロナ禍の中で迎えた秋の3連休初日の11月21日、「無人駅の旅」をした。紅葉も見たいがコロナ禍も気になる中で、「密」のない「無人」が心の中で奇妙に妥協した。目的地に選んだのは大井川鉄道である。

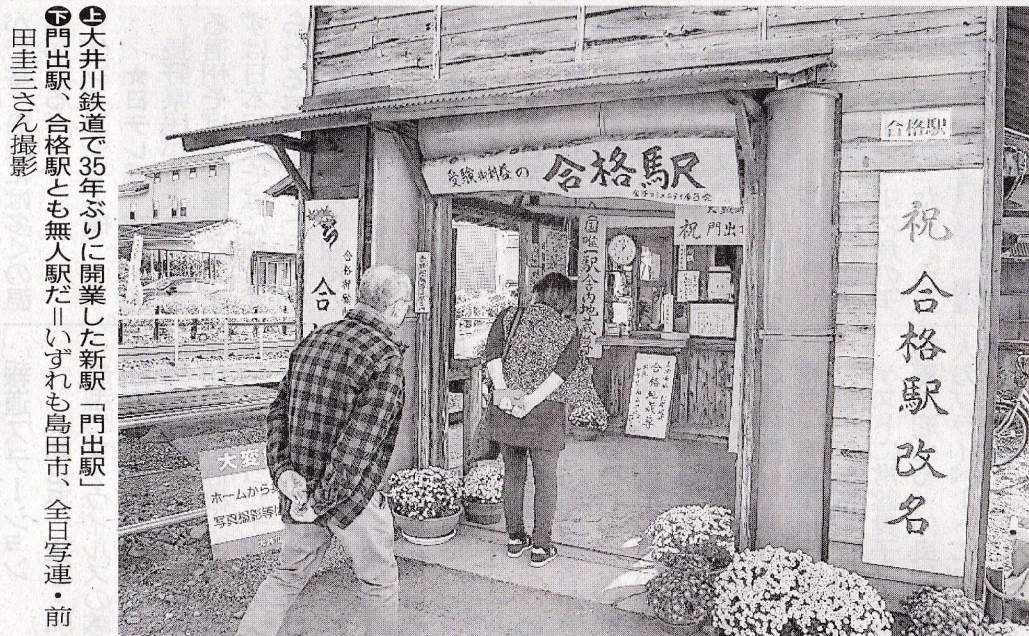
大井川鉄道はJR東海道線と接続する金谷駅から大井川沿いに千頭駅まで北上する「大井川本線」(39・5キロ)と千頭駅から井川湖に向かう「井川線」(25・5キロ)で運行され、蒸気機関車(SL)や急こう配を登るアプト式鉄道を楽しめる人気ローカル線である。両線合わせて33駅のうち、26駅が終日無人駅。運輸営業の開始から今年で93年、沿線の過疎化の歴史を背負って走り続けている。

「無人駅の乗降をいくつか体験したい」という私の希望は、玄関口にあたる金谷駅で簡単にかねえられた。金谷―門出駅間の乗降がフリーとなる「合格祈願周遊きっぷ」(500円)を購入すると、区間内6駅のうち無人駅が四つもあつた。

この3駅をセットにした「合格祈願」の周遊きっぷで集客につなげる企画である。無人駅は全国で増えている。国土交通省の集計によれば駅員が終日いない無人駅は全国で4564駅で、全体の48・2%を占める(2020年3月時点)。

この周遊きっぷの説明がある。大井川鉄道は11月12日、35年ぶりに新駅「門出」駅を開業させた。同日オープンした複合施設に隣接する無人駅である。同時に隣の「五和」駅を「合格」駅に改称した。合格駅の隣には地元の日限地蔵にちなんだ日切駅があり、

その日正午前、合格駅でたった1人下車した私を、無人の木造駅舎内で「合格地蔵尊」が迎えてくれた。金谷駅に戻る次の上り電車まで1時間50分。祈るには十分な時間だった。(前静岡県監査委員・富永久雄)



①大井川鉄道で35年ぶりに開業した新駅「門出駅」
②門出駅、合格駅とも無人駅だ。いずれも鳥田市、全日写連・前田圭三さん撮影